

て昨夜の事を悔いてはいない。彼は自分を憎むだろう。きつとこれから誰かに触れられる度にヤマトを思いだす。

この世界で強者として生きていくには今のところジプスで身を立てるしかない。だから彼はこれからもヤマトの隣に居続けなければならない。もしも彼が自分を厭いジプスを離れる決断をするならばそれも受けいれるつもりだった。それ程の変化を彼に与え一生を左右するだけの存在になれるなら、向けられるのが憎悪だとしてもヤマトには甘く感じられる。

「どうして薬なんか使った？」

「以前にアルコールは悪酔いすると言っていただろう？」

私のサポートをして龍脈の力にも触れているお前では、同じ系統の術も効きが悪いかもしれないからな」

「そういう事を訊いてるんじゃない！」

では何を訊きたいのかと問い返したかったが、彼の態度がそれを許さなかった。唇を噛みしめてヤマトから視線を逸らさない彼は言葉を誤ればすぐに爆発して怒り狂いそうだ。憎まれても構わないと思っただばかりなのに、出来るならそうはなりたくないと考えている自分に気がついて自嘲めいた笑みが浮かんだ。

「何を笑ってる。俺の質問に答える、ヤマト」

更に言い募ろうとして彼は立ちあがり、すぐにその場に

しゃがみこんだ。

「どうした？」

「つてえ……」

近寄って今度こそ彼の肩に手を置いたが、その手はすぐに叩き払われた。

「頭も痛いし尻も痛いしおまけに……ああ、もういいっ！今はきみの顔なんか見たくない！出ていきたければさっさと出てけ！」

ヒステリックに喚きちらし、普段の様子からは想像もつかない荒っぽい動作でヤマトを外へ追いやろうとする。

「そうしよう。お前は今日は局へ出ずに休め。夜には戻るが、待つ必要は無い」

「誰が待つかよ！」

まだまだ言い足りなさそうな彼を置いてヤマトは自室を出た。

いつもより早い時間だったが、元々勤務時間などあってないような状態だ。いつも通りジプスの局長、世界の支配者として振舞うヤマトを不審に思う者はいなかった。

「局長、彼はどこに？」

「昨夜少し体調が悪いようだったので今日は休ませる。お前達もあいつがいないと何も出来ないわけではあるまい」

何気なく声をかけた局長は局長の言葉に焦りながら持ち

場に戻っていった。ヤマトは半分以上皮肉のつもりで言ったのだが、半日程彼の予定外の不在におたおたする現場を眺めるうちに現在のジブスにとつて彼がどれだけ重要な存在になっているか改めて実感していた。

書類仕事の為執務室で暫く一人で過ごし、また戻ると司令室の中心に何故か彼がいた。いつものようにヤマトの不在を取り仕切っている。

「何故、お前が」

彼は答えない。露骨にヤマトを無視して局員に指示を出し続ける。そこへ迫がやってきて話しかけた。

「体調の悪いところをすまないな。具合はもういいのか？」

「へえ、そういう事になってるんだ？」

「何？」

「なんでもない。そんなにひどくはないんだよ。ヤマトがちょっと心配し過ぎただけ」

ヤマトのフォローをするあたり現在の立場を捨てる気は無いのだろうか。考えあぐねて逡巡していると彼から声をかけてきた。

「心配しなくても、ちょっとだるくてきついだけだ」

「しかし……私がお前にした事は」

「こんなところでそんな話をするんじゃない！」  
きつい口調で言って、それから読めない無表情に戻る。

選択を迫られていた頃に彼はよくこんな顔をしてどこかを見つめていた。

（ではやはり私から離れるつもりなのか？）

「なんて顔してるんだ。しっかりしろよ、局長」

彼に言われて我に返る。彼を見てばかりで自分がどんな顔をしているかなど意識していなかった。

「昨日の事だけけど、とりあえずきみは俺をどうしたいのか俺に説明しろ。話は全部それからだ」

言うだけ言って彼はまた仕事に戻り、次に必要な内容について話しかけてきた時にはすっかりいつもの口調だった。

口もきかない。あるいは夜に戻った時には姿を消している可能性なら想定していたが普通の態度を取られると逆に居心地が悪い。

（彼にとつてはもうどうでもいい事なのか？）

間に不穏な気配を挟んだまま二人は一日を終えた。

それから数日、彼はすっかり今までどおりに接してきた。

あまりに変わらない態度にヤマトは彼が本当に何も起こらなかつた事にするつもりなのかと怪しんだ程だ。

彼はきつとヤマトに求めた事の答えを待っているのだろう。だがヤマトには何も答えられない。利害の駆け引きを抜きにした人間関係においてヤマトは年齢よりもずっと幼く未熟な自分を自覚していた。